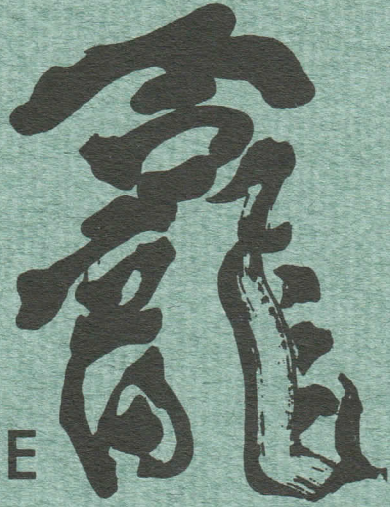


NICHE



龕 NICHE

がん【龕】 ①仏像を納める厨子。②棺(ひつぎ) - 広辞苑 -

ニッチ【niche】 (㊟Nische)、がん(龕)とも書かれる。壁体内に掘られ、多く平面半円、半円筒状で、上に1/4半球をいただく凹所、彫像などを置く。 - 共立・建築辞典 -

niche (nich), n. [Fr.niche, from L.nidus, a nest] 1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust, or vase. 2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it - Webster's New Twentieth Century Dictionary -

ニッチ No.15 目次

- * 会長の苦状をお察しいただき、
100周年募金に多くの方々からの
拠出金をお願い申し上げます
〈南迫哲也〉 ----- 1
- * 建築学科の近況について 〈十代田昭二〉----- 2
- * 篠原梅吉氏と金尾武彦氏に聞く
－先輩を訪ねて その6－ ----- 3
- * 工学院大学建築設計教育の今昔そして未来
〈木村幸弘〉 ----- 12
- * 築地そして新宿の今昔
－工学院大学学園の発展－
〈小高鎮夫〉 ----- 20
- * 同窓生ニュース
建築学科創設35周年記念祝賀会を終えて ---- 24
- * 第24期（1989年）一般会計報告 ----- 26
- * 第25期（1990年）一般会計予算 ----- 27
- * 同窓会運営委員 ----- 28
- * 同窓会誌(ニッチ)発行のための賛助金者----- 29
- * 平成二年度建築学科卒業生名簿----- 32

「会長の窮状をお察しいただき、 100周年募金に多くの方々からの 拠出金をお願い申し上げます。」

建築学科同窓会長 南 迫 哲 也

同窓会会員の皆さん、お元気で御活躍のことと拝察申し上げます。

昨年度の建築学科35周年記念式典並びに祝賀会には約500名の卒業生、同窓会員の皆さんが参集されました。なつかしい顔に多勢お会いでき、本当に嬉しく思われました。御協力ありがとうございました。

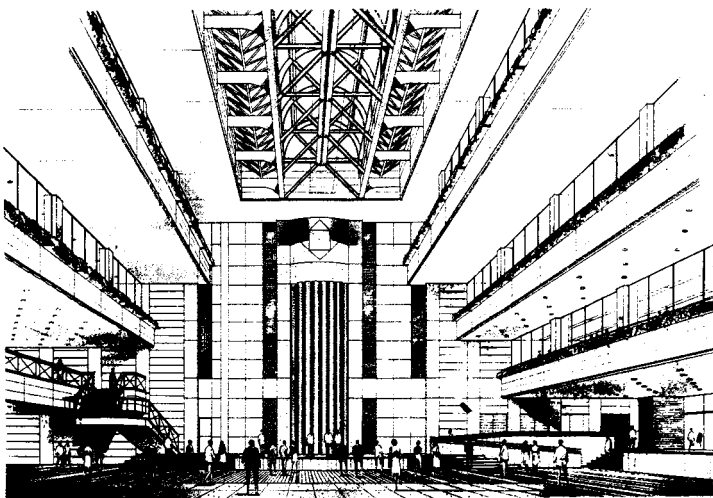
10年前の25周年のあとには、同窓会が4年間毎年100万円づつ、すなわち400万円を加え、奨学基金を総額500万円とすることができました。

今回の35周年記念事業では、奨学金募集も事業の一つとして個人は勿論、各企業の方々の御協力により、前回とほぼ同額を奨学基金として計上することができ、従って建築学科同窓会からの出費は前回の半分を下回る額で済ませることができました。

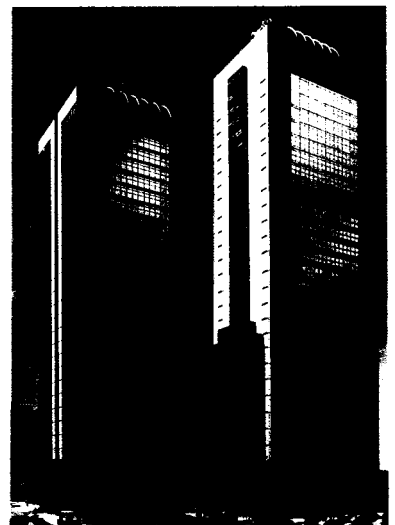
さて毎年お願いしている、同窓会誌「ニッチ」の発刊賛助金は一口2,000円でようやく皆様の間で500～600口にさせていただき、同窓会費は、発送費だけで済ませそうな気運となってきました。まことにありがたいことです。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

さてお願いの最後は、今年で最後の年になります、学園創立100周年記念募金のことです。どうか建築学科同窓会も、他の同窓会に勝るとも劣らない拠出率にしたいと思っております。1口（1万円）でも私は良いと思いますので、一人でも多くの方々からの御協力をいただきたいと思っております。特に未だ拠出されていない方々の御協力を強くお願い申し上げます。非力な会長の立場をどうか御賢察の上よろしく御配慮下さいますようお願い申し上げます。総会に多くの方々の御出席をお待ち申し上げます。

(昭和34年卒)



1992年9月には、II期工事が完了し、1階ロビーにはこのような大アトリウムができる。ここでは、1500名以上のセレモニーが可能となり、入学式・卒業式をはじめ都市的イベントが開催される計画となっている。



街区全体の再開発が終了するのは、第III期工事の広場が完成する1994年3月の予定。

建築学科の近況について

建築学科主任教授 十代田 昭二

平成2年度は第二部再開と都市建築デザインコース新設の準備に終始した忙しい年度であった。

何れも都心型大学としての新大学棟竣工を期して大学のそして建築学科の発展・充実のために平成3年度より発足するものである。

第二部は新大学棟の工事のため昭和61年度より学生募集を一時停止していたが、次に示す新しい理念をもって再開・再生する。

- 従来の高校の新卒者だけでなく、企業等で働き、勉学意欲をもつものを企業推薦として受入れ、又本学の他学科はもとより他大学の他学科の卒業生の編入学を可能とし、生涯学習社会に貢献する開かれた大学とする。
- 各学科間の「垣根」を低くして、他学科の学生の履習を可能とし、又誰でも何時でも履習出来る専門基礎科目を特週に設け、各学科の専門をこえた学際的な知識を身につけ、工学を総合的に勉学する。

建築学科では数年前より学園将来計画と並行して科の将来計画を進めてきたが、その結果都心型大学にふさわしい内容を持ち、現代・将来共に社会の要請に応えるものとして都市建築デザインコースを新設し建築学科も発展充実を計ることとなった。

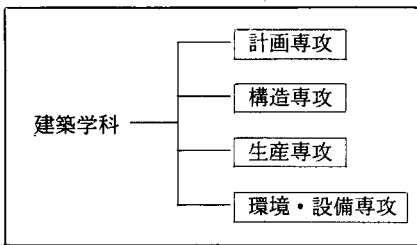
その結果従来の建築学科は建築学コースとなり、その建築学コースは伝統ある本コースとして一学年約100名を教育して行く事となる。

建築学科も以後2コースとなることから、本大学の他学科と歩調をそろえて行く事が出来るし、今迄の様に一挙290名前後と云うマスプロ的教育の表面的な汚名も挽回出来るはずである。

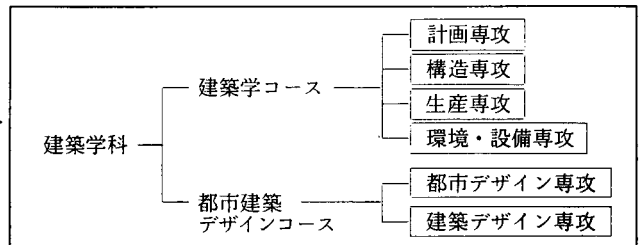
この機会に両コース共充実を計り大学院に、デザイン関係では菊竹清訓氏を、又構造関係では小林啓美氏を客員教授としてお迎えする。

近未来・将来に対して希望と期待をもって見守って欲しい。

従来の建築学科

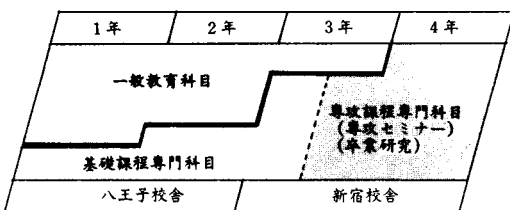


1991年度より

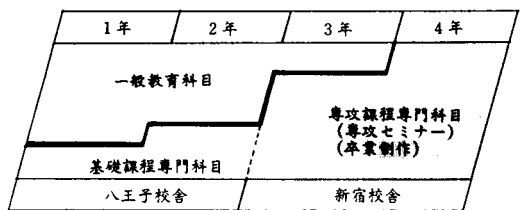


第1部カリキュラム構成と専攻制

■建築学コース



■都市建築デザインコース





篠原梅吉氏と

金尾武彦氏に聞く

—先輩を訪ねて その6—

聞く人 初田, 岩田

初田(H) きょうは、遠い所をわざわざお来しいただきまして、ありがとうございます。

ご存じのように、つい最近大学の建築学科の創立35周年のお祝いをやったわけです。当然ですけども、うちの学校は大学がスタートではなくてその前から長い歴史をもっておりまして、優秀な卒業生を出していたわけです。わりと新しい人にいろんな人がおられて話やなんか聞く機会も多いんですけど、ちょっと時代をさかのぼると、極端なこと言うと、『えっ、そんな卒業生がいたの?』ということになってしまう場合があるので、できる限り貴重な記録になるような方々から、お話をお伺して、ずっと「ニッチ」に連載してきたわけなんです。今回は篠原先輩と金尾先輩にわざわざおこしいただきまして、かつての工学院の実体というが大袈裟ですけど、その内容がどういうものだったかというふうなことを中心にお伺いしたいと思っています。

篠原さんが、学校に入られたのは、何年ですか？

篠原(S) 昭和3年の9月です。昭和3年に新宿の校舎ができ、2月から募集を始めたんだと思いますけども、新宿校舎の二期生ということになるんでしょうか。それで卒業したのが、昭和6年の2月ですね。これが卒業証書だから。

H そうすると、2年半ということですか？ 学校におられたのは。

S そうです。予科が1年あって本科が1年半あったんです。これ、きょう見たら、2部って書いてあった。夜間のことですね。当時は昼間はないんですよ。予科と本科とあって予科は、昼間もあったんです。ぼくは予科は昼間にきてたんですけどね。本科はないから夜通いました。

H 卒業証書には工学院と書いてありますけれども、もう名前は工学院になっていたのですね。

S 築地から新宿に移って来た時に変わったんです。

H 本科ということですが、具体的にどのように違うのですか。

S 予科というのは代数、幾何とか教えるのです。金尾(K) 一般教養ですね。

H 本科というのが建築になるんですか。

S そうです。

H 金尾さんは篠原さんよりも後の入学になるんですか？

K 私は、昭和10年に予科に入ってそれで、工学院には4年いたんです。

H そうですか。4年というと篠原さんの2年半と違うんですが、学校の組織が変わったわけですか。

K そう、なぜか私は10年4月に入って、14年の3月卒業しているんです。

H そうですか。

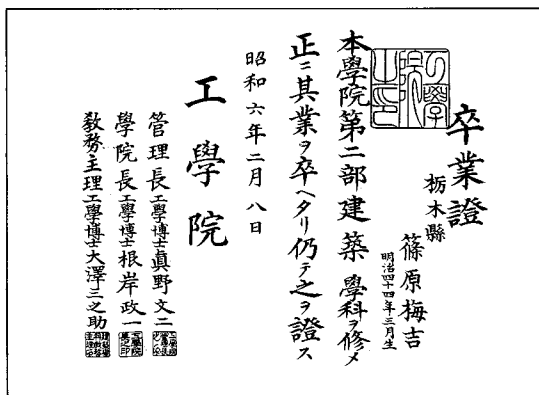
K 当時、学校は1期が半年制度だったんですよ。

H そうすると、8期おられたわけですか？

K いやいや、本科へ2年行って1回すべっているのかな。すべっているのかもしれない。予科は2年行きましたね。予科というのは昼間だったんですよ。(予科は1年半かもしれない)

S 入学資格は中学校卒業程度だったんです。当時、中学というのは、全員がいくわけではないですからね。今の高等学校みたいなものですよ。

K いや、そうじゃなく、小学校から工学院に入るまでに1年間、高等小学校へ行きました。高等小学校は2年制で卒業になるんです。それを高等



小学校に入って1年入って工学院に行ったわけです。

H お2人とも、昭和の初めに工学院に来られたのですが、当時工学院というのはどういうふうに社会的に評価されていたんでしょうか？

S あの時分には早稲田工手学校というのもありましたが、早稲田よりこちらの方が、教授陣がそろってるんです。東大系で。それなもんで、ぼくの友だちなんかも父親なんかは内務省かなんかの技師をしていて、優秀な人だったんですけどもね、「早稲田より工学院の方がいい。」と言って工学院に来ました。教授陣にあこがれて来た人がずいぶんございます。それに蔵前の工業よりいいとか、まあ一番いいんだということでした。入るのは楽なんです。資格があるものは、無試験なんです。資格のない者は、予備生ということにして、その間に予科で資格をとればいいということでした。

H 予科で学びながら、本科に入る資格もとれるということですか？

S そうですね。優秀な者はね。そういう人は特待生と言っていたと思いましたよ。

とにかく、いろいろ勉強の機会を与えたわけです。そのかわり、どんどん、落としちゃうんです。出席が悪かったら全部落としちゃいます。

H じゃあ、今の大学とはちよっと違いますね。

S 入るはやすく、出るはかたいです。

K しかも廊下に点数を発表するわけですよ。

半年づつ。点数は、巻き紙で、何点、金尾武彦と書いてあるわけです。一生懸命探して一番最後にあったというところで。

S なければ留年です。落第が非常に多かったです。

K 95点以上が特待生で半年間、月謝がただでした。

H それは科目ごとの点になるんですか？ それでも全体の成績ですか。

S 全体だったと思います。

K トータルでね。トータルで60点以下が落第でした。

S そうです。

K 95点以上の人が、6ヵ月月謝免除と。91点～94点の人は3ヵ月月謝免除といういい待遇があったんですよ。

その時分の物価を覚えていないけど、確か、たばこがゴールデンバットで7銭で、それから少しいたばこが10銭でした。大学出て給料が50円位だったんです。

H 工学院の月謝はいくら位だったんでしょうか。

S うちからぼくは月に金を30円送ってもらって、30円で、月謝払って、3食つきの月宿代を払って生活していたですね。だから、月謝はほんの何円かでしょ？

S そうですね。

H まあ、でも大学卒業して給料が50円の時代とすれば、それほど安くはないですね。やっぱりかなりの……

篠原さんの時と金尾さんの時とは条件が違うのかもしれないけども、中学卒業後、工学院に入るのですか。

K いや、工学院は中学ではなく小学校終えて、2年かなんかやってきて入れた。私は予科をやりましたから。

H 篠原さんの時も同じような条件ですか。

S おなじですね。予科昼間部。それから本科夜間部と。こういうふうな状態でした。

H そうしますと、篠原さんの時も、高等小学校を出たあと、すぐ予科に入れるわけですね。授業は何時から始まったのですか。

S 昼間部が、昼の12時から5時まで。そして夜間部が6時から10時まで。

K お昼からだったんだねえ。

H 10時までというのは、ずいぶん遅いんですね。

S もう、きっちりやりますよ。本科も10時までやっていたんだ。

K いや私の時は9時30分までだ。

H 金尾さんの時は違うわけですね。

K 夜が5時半から9時半までと30分早くなっていたと思います。

H 予科が昼間部と夜間部で、本科が夜間部しか

ないというのは金尾さんの時も同じですね。

K 同じです。ただ私の時は昼間部が1時から5時までだと思います。

H 工学院の前の築地の工手学校へ通われた先輩には随分お話をお伺してきたんですけど、歩いて学校へ通ったなんて話もありましたが、当時は、どういうふうに工学院に通われてたわけですか？

S ぼくなんかは、当時の市電ね。今で言う都電で、昔の二幸ね、今のなんて言うんだっけ？

岩田(I) アルタですか。

K アルタ。あそこまで市電がきてたんですね。

H 国鉄も走ってたと思うんですけども。

K 私は両国から新宿まで国鉄できていたのと築地で乗りかえて市電で二幸前まで来た時もあります。

H 金尾さんは当時どちらにお住まいだったんですか？

K 隅田川の脇の、両国に住んでいました。

S ぼくは中野のなべや横丁に下宿してたんです。あの時には、西武電車も走ってました。まだ市営に買収されないで。

H 市営電車というのは？

S いや西武電車。

H 今の西武電線とは違うわけですか？

S 違うんです。

H そうすると今の中央線になるんでしょうか。

S ぜんぜん違うんです。これは電車だけしか動いていない。

H そうなんですか。

S それが今度市営、市に買収されてまして、それから都営になりましたね。あれはやっぱり荻窪までしか行ってない。

K それは、何んですか？ 青梅街道を走ってたんですね。

S そうです。青梅街道です。西武鉄道と言っていました。

K そう言えば成子坂から下がっていた電車がありましたね。

S あれです。

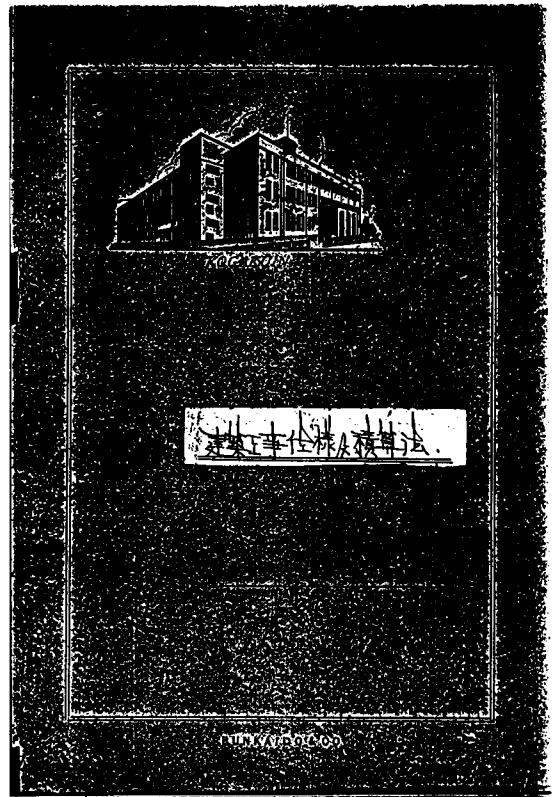
K あれは、市電でなく…

S 西武電車と言ってたんです。

H 篠原さんは、そうすると昼間は何かされていたんですか？

S 昼間ですか？

H 本科に通われている時です。



S 駿河台あたりでニッシン英語学校へ行ったり、理数を教える研数学館へ行ったり、それからあそこに図書館がありまして、都立の駿河台図書館ってのが、それから大橋図書館というのが九段下にありました。だから図書館通いでしたね。

K 篠原さんは勉強家だったんだ。私はうちの親の手伝いをやっていました。

H 当時の授業はどんなだったんですか。

S 先生の話をもとにノートなんか、写すんです。教科書がないんですよ。そこで全部黒板に書くんですよ。書くのも、どんどん、どんどんはやいんですよ、それが。脇の人となんか話している暇がないです。書いちゃうと、それっきり。「もう2度とやらないぞ。」って言うんです。だから、全部、自分で写して、それで図書館に行ったりして調べて…

H それでこんなになりっぱなノートがたくさんそろっておられるんですね。

S 図書館で調べて、また書き加えたりしました。

K 私はね、申し訳ないけどね。昔のものはみんな戦災で焼いてしまいました。

S 金尾さんは、当時昼間は何をされてたんですか。

K うちの親父の手伝いをやってたんです。

H お父さんは何か、建築関係の仕事だったんですか。

K 社寺の方の工務所だったんです。

H で、昼間手伝われて、夜、学校へ通われた。

K 手伝いっていても、現場の掃除でした。

S いいね。あんたは家が建築関係だったから。

ぼくんちは料理屋なんだから。

H 中野で開いておられたんですか？

S いや、実家は栃木県の足利ですから。ぼくは学校へ行きたくてしょうがなかったんですけど、「商人は、勉強なんかしちやいけなない。」と言われてました。学校の先生がくやしがりましてね、「篠原さんの力があつたら、どんな学校にも入れるんだけどな。」って言うんですけどね。親と兄貴が「とにかく、商人は勉強しちやあいけなないんだ。勉強したらうちを継がないから。」と言うんです。それで18になるまでうちの商売を手伝っていました。だけど、伯母が理解がありましてね、その人は土木屋なんです。それで親を説得してもらって、東京へ来たんです。勉強したくて、したくて早稲田の工業系やなにか全部取ったりしてね。ずい分勉強しましたよ。

H 当時の学生というのはどんな方が多かったんですか？

S はんてんきの人なんか5分の1位いましたね。

H はんてんきの人？

S 半天を着た大工さんです。

H 職人さんということですか。

K 私の時は結局卒業生は16人だったんですけど、初めは何10人もいたんですが。そのうちで大工さんが1人だったでしょう。先輩は勉強家だからさ、工学院のあと日大まで行ったわけですよ。

S 学位取ろうと思って一生懸命やったんですけどねえ。だから本がいっぱいあるんですよ。

H あとは、どんな方が多かったんですか。

S あとは、役所勤め。

K ぼくのときは、役所の方が2人か3人いました。ほかには大林組さんなどの大会社の人でした。大会社の給仕。

S 給仕です。三菱地所の副社長までした鈴木昇太郎さんって言う人でさ三菱地所会社の給仕をしていて、それで築地の工手学校へ行っただけです。

から。そういう時代だったですね。会社の方が理解しないとね。学校へは通えませんでした。給仕やっても長く働かせますからね。そういう時代でした。ぼくのクラスの者が、当時の食堂や製図室の写真を撮ったのがあります。その写真で、当時の様子がすぐ分かります。半天着もいますし、詰めえりの人もいます。

H はんてんきと言ったんですか？ 当時は。

S 半天着と言いました。印半天。

K 私の時は半天着とは、言わなかったけども、半天と言っていました。

S 先生は、東大卒業された方が主でしたね。

K それと、院生の方がよくきていたらしいですね。それとお役所の方。

S 吉田先生なんかは、大蔵省営繕課管財局の技師をしていた。

K 大蔵省の管財局とか東京府の建築技師とか。私の時もいました。

S 大沢三之助先生とか、藤島亥治郎先生とか、小石田しょうぞう先生なんかもいたなあ。忙しい人は、助手の人がやりましたけど。それでも先生はモーニングなんか着てくるんですから。ほとんど式典ばかり出ているらしくて。

K 私の時は蔵田周忠先生がおられた。

H 蔵田先生はうちの卒業生でもあるんですね。

K そうなんです。あの人は後に武蔵工業大学の先生になった。我々には何を教えてたかと言うと、パースを教えていたんですよ。あの人も大変器用な方で、絵をタッタカ、タッタカ黒板に書いてゆかれるんです。

H 他に有名な先生、面白かった授業っていうのはどんなのがあったでしょうか？

K そうですね。構造を教えた先生が、大蔵省の勅任技師の人でした。とても講義が上手でした。当時建築の人は区役所にいなくて、全部警視庁にいた。

S そう、警視庁だったです。警視庁が建築を司っていた。

K 各警察に建築係があつて、各警察に建築確認をもらいにいった。

S 卒業式だとか入学式だとかには警察署長がきたりした。勅任技師なんていったらもうたいしたもんなんですけど。それがみんなに教えてくれた。

K 私の時もね、大蔵省、営繕管財局の井上先生

がおられた。今の建設省、ご存知でしょうけど、当時、大蔵省管財営繕局だったんだね。それが戦後、独立して建設省になった。法規の先生は、あれは東京府の技師だった。製図の先生も東京府の技師でした。

H 蔵田周忠先生の授業はどんなでした。

K あの人はパースだけでした。週に1回、「今日は外へ行って木を写生してらっしゃい。」とか「写生しなくちゃあ、パースは書けない。」とか言っていました。

H 当時の学生の年齢はどの位でしたか。

K 建築を勉強したいということできた早稲田大学の経済学部出た人とか、それからずい分お兄ちゃんがいきましたよ。だからぼくなんか子ども扱いでしたね。

H 年齢はそれこそ今ですと大学生がいうと何才ぐらいと大体決まっている場合が多いんですけど、もうかなりバラエティーに富んでいた訳ですね。

K 完全に田舎の中学校を終えてきているので、そうすると18才でしょ。それから工学院にきた人がかなりいましたね。

H どんなかっこうして学校には通われたんですか？

K 一応、金ボタンでした。

H 金ボタン、学生服ということですか？

S そうですよ、詰めえり服着て。

H 昼間、働いていた人もですか。

S そうです。昼間は学生服着て給仕やってたんですね。だからどこの会社でも給仕さんというみんな金ボタンに詰めえりでした。

H 学校は半期単位に試験があるわけですか？

S そうです。試験に合格すると一級あがるわけです。60点以下は不合格です。

K 点数を巻き紙で廊下に張り出しちゃうんですから。

H きびしいですね。

S 点数まで全部書き出されますから。「あいつ92点だ、半特待生だとかね。」「ありややっぱり特待生だよ。」とかね。

H 当時の授業は洋風建築が多かったと思うんですけど、和風建築なんかも習ったんですか？

S ありましたですよ。社寺建築なんかありましたもの。

K 社寺建築があつて、その時はね、私の父親が、

社寺をやっていてオイルペーパーで烏口でお宮さんなんかを書いているわけです。私が適当に図を書いていると怒られたものです。学校で聞いてきたと言うと、「いや違う」なんていわれました。

H どなたが、教えておられたんですか？ 社寺建築は。

K 日本建築史は、だれだったですかね？ ちゃんと日本建築史、西洋建築史という授業があった。

H 金尾さんの時は何人位卒業されたんですか？

K 16人です。

H 16人ですか。やはり半年単位で進級していたんですか？

K そうです。

H 篠原さんの時は何名の方が一緒に卒業しましたか。

S 96名と多かったです。でも入学時にその5倍の400人以上いました。どんどん落ちていったです。

K 昭和5年が不景気の年でしたね。

S そうですね。大学は出たけれどって卒業してもみんな仕事なくて浪人して。

K 先輩は卒業後どこに勤めたんですか。

S 小川建設。小川清二さんがこの2回の卒業生ですから。小川建設に10年いて、その後、昭和15年頃、三菱地所へ入ったです。

H 当時、工学院卒業した方はどんな所に就職して行っただしょうか。

S 多いのはね、宮内省の内匠寮。あそこはずい分入りましたよ。

H あとは、どんな所にゆかれるんですか？

S それからあとは請負業者とか、役所関係ですね。設計事務所にも行きましたし、ありとあらゆる所でしょうね。

K 96人も卒業生がいたんですね。

H 金尾さんの時代には、どんなところに就職してましたか。

K やっぱり、業者と建築事務所、それからお役所ですね。宮内省は多かったですよ。役所がどんどんとりにきたんです。警視庁からくるし、それから海軍の技術部、やっぱり軍事施設の工事が忙しかったんでしょう。それから満鉄に行ったのがいる。

H 設計事務所というのは、当時相当あったんでしょうか？

S まだ、それ程重要視されていなかったのね。

役所の下請けというのかな、少なかったですからね。

H 篠原さんは最初、小川組に就職されて何をされてたんですか？

S おもに現場ですね。初めのうちは、現場見習い助手。

H そのあとはどういうことされたんですか？

S それからは、現場主任です。それから今度は設計。設計と言ってもおもに原寸図を書いていたんです。職人に渡す図面です。

H で、そのうちに三菱地所の方へ移られた訳ですか。

S その間に日大へも行ったんです。

H あの小川組に行っている時に、日大に行っていたのですか。

S そうです。給料も少し下げられてね。それで行ってもいいということで、承認をきちんと得て行きました。第一そうでないと現場に行ったら早く帰れませんからね。給料を下げるかわりにいつでも好きな時に行きなさいと。

H 日大を出られて、三菱地所へ入られたわけですか。

S そうです。

H 三菱地所ではどんな仕事をされていたんですか？

S 三菱地所では、おもに初めは宿舎とか工場の設計で、そのうちに現場へ行くようになったわけです。重工関係の仕事が多かったですね。

H 金尾さんは？

K 私は最初から竹中工務店です。面接してその次の朝採用通知がきたのを覚えております。当時の竹中の支店長が工事学校出で、その次の支店次長も工事学校出、それから現場の責任者もというように結構工学院出がございました。最初は、ずっと現場でしたね。で、私が設計部に移ったのは、兵隊から帰ってきてからです。なんとかして設計部に入りたくて……。あの時は大学卒でないと設計部に入れないような雰囲気だったので。松本興作さんがよく話していましたね。設計部というのは、あらましの図を書いて、あとはみんな現場で施工図と原寸図を書き、職人に渡したと。

S 当時は、もう何でも原寸図を書かされたですからね。

K それで、やはり現場にいても、図面にかかわりたくて。今、篠原さんが言うように現場で書く図面もあるわけです。たとえば若い時、杭工事の時に。杭の配置図を書いて、それを毎日色つけ

ていくようにしたりもし、何でもかんでも丁定規をもちたかったんです。設計事務所の人が大体20分の1詳細まで書いてあとは全部現場で、図を書くんですよ。

H 当時の学校で、今と違うところはどんな点でしょうか。

K 生徒監というのがいたんです。

H 生徒監とはどんなことをやるんですか？

S この人は教室をずっとまわって歩いて、勉強してない学生がいると、投げつけるんです。

H その人は授業中見て回るんですか？

S 授業中でもなんでもいつでもです。

K 私がある時、あいた部屋でね、浄水場を見てたんですよ。そうしたら生徒監につかまっちゃってね、そこでお説教。

S 暴力をふるうんだからね。

K 当時工学院の道路をずっとまっすぐ新宿駅へゆく方向の角に精華女学校というのがあったんです。その頃、ちょうど女学校から文句が出ていたんです。「うちの学校の娘を、工学院の生徒がからかう。」と。

H じゃあ、金尾さんがからかったんじゃないかと思われたわけですか？

K その時に、はからずも勉強さぼってね、浄水場をボケーと見てたんですよ。そうしたら生徒監につかまっちゃって、「おまえたちか！」「精華女学校から苦情がきているけれど」と言うようなことで。まあ、なつかしい思い出なんだけれど、規律の管理には厳しかった。

S そういう点は厳重でしたね。

H 授業なんかで一番印象に残っているのはどんな科目ですか。

S ぼくが一番残っているのは、日本建築史の先生だね。通信省管財の人で、いつもモーニング着てきて教える先生。

H どなたですか？ それは。

S えーとね、あれは確か勅任技師の人です。

H 日本建築史というのは、当時どんな教え方をしたんですか。

S 黒板に書いてです。どんどん書いちゃうんですからね。

H 今ですと、スライド見せたりするんですけど、当時はそんなことはないでしょうからね。

S 全然ないですよ。

H なかなか形は教えるににくいですよ。そういう意

味では。写真もそれ程ないでしょうしね

K 一切切切、青いオリーブ色の黒板に先生がどんどん書いていくんです。

H 金尾さんなんかはどんな科目が一番印象深いですか？

K 蔵田先生が印象的なんですよね。パースのね。

H やはり、絵を書くのが好きだったということですか。

K そういうわけでもないんでしょうけれど、あの人の外国の話もまぜた内容がよかったです。

H 外国って、ヨーロッパの建築の話なんかするわけですか。

K グロピウスのところから帰ってから間もなくして工学院に来てましたから、グロピウスの話は私にはまだピンとこなかったけれども、要するにドイツの話とかね。楽しかった。

I 設計の授業なんかはどんなふうだったんですか？

K 設計の授業はね、一応学校で、書けるだけ書いて、それで持ち帰ってもいいということでした。

K 表現は一切ケント紙に烏口で書くインキング仕上でした。ヨーロッパのオーダーのアカンサスを書かされました。そうそう、最初の製図というのは1cmの中に線を10本書くとかでした。だから、もちろん学生の時は、製図というのは烏口だとばかり思ってたんですが、社会に出たら、美濃紙だったんです。

H 設計課題みたいなのあるんですか？ 例えば「住宅を設計しろ」とか。

K ありました。初めは青写真を写していましたが、そのうち課題をやるわけです。

H 卒業設計みたいなものもあったのですか？

S あったようですね。ぼくは病院建築やったような気がするんですよ。

K ぼくなんかビルディングをやりましたよ。

H そう残っていると楽しいんでしょうね。

K 戦災で焼けなければ。

H 当時はあと、どんな科目があったんでしょうか？

S 科目ですか？ 科目は日本建築。

K 西洋建築でしょ。 施工法でしょ。それから家屋構造と構造法…。

S 木造のことを構造法と言ってたんですよ。

K えっ？ 家屋構造って言ってたんですよ？

S いや、建築構造法って言ったと思います。施工は材料施工法と書いていたでしょ。設計計算。計算もやりましたね。それと材料構造強弱学……

K 計算は鉄骨計算と鉄筋計算と一緒にだったんですか？

S そうですね。田中正義先生。この人もきてましたね。この人は構造の第一人者だったんですけどもねえ。

I 建物別には何かなかったんですか？ 病院とか図書館とか。

K いや そんな大きいのはやってなかったですね。あの時には。

H おもしろい学生なんていましたか？ おもしろいというか、記憶に残っている、こんな変わった学生もいたというような……

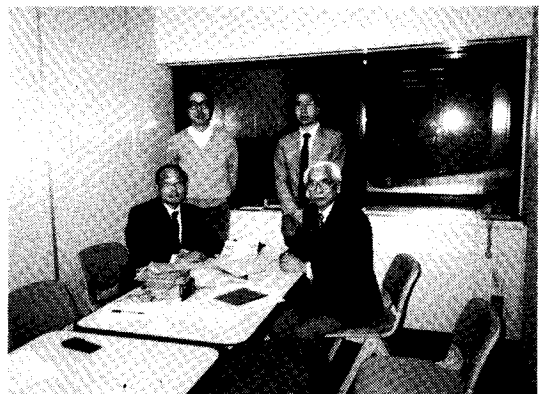
K いまは、死んじやったけど、……

S 中には、いましたよ。朝鮮人なんかもいましたしね。熱心な人でしたね。でも、併合されたのを悩んでいたね。

K あのね、文通は時たまやっているんですけどね、サイパンの現地の人もいました。サイパンですから、スペイン系ですかね。今は、グアム島で、工務店やっているんです。ずい分おとなでしたよ、その人は。

I それは、留学生か何かですか。

K まあ、留学生なんでしょうね。その奥さんが、日本語をやっぱりできるんですよ。彼はどうして日本語ができるようになったか知らないんですが、ちゃんとした日本語で学校へ来てました。恐らくあの時分ですから、相当りっぱな曾長の息子なんでしょう。卒業して、サイパンに帰りました。30年前奥さんと学校へ訪ねてきてくれて「金尾というのと同級生だった。」と言ったらしいんですよ。



ちょうど私が校友会の理事やりましたんで、学校の人が知らせてくれたんですよ。今から30年位前の話でしょうか。あるいは25年位前か……

H 当時の新宿西口というのはどんなでしたか。

K 私は今の二幸前で市電を降りて、汚ない汚ないガードをくぐって今でもありますねえ、なつかしい。あそこをくぐって、今の光座ひかりざという小田急ハルクの裏を通って、今のブリッジかな。あの辺あたりに女学校があったんだよね。そして、今の小田急あたりはですね。たばこに「あかつき」というたばこがありまして、その専売公社だったですよ。相当な面積ですよ。そして工学院があったでしょ。その裏に木造の日本中学校というのがあった。その時分には、工学院に同窓会館っていうのがあったんですよ。そこに食堂などもありました。そうそう、同窓会という木造2階建ての建物の2階にね、ビリヤードかなんかあって、ぼくのような子どもが近寄れないんですよ。

S 1階が食堂。売店もあったしね。ぼくら子どもだったから、そういう所へは入れないんですよ。大人じゃないからね。その時分、もうはたち過ぎのお兄ちゃんたちが、仲良さそうな顔してたんですよ。大体卒業生が使ってたんですよ。あの建物は在校生の子どもなんか使えなかったんですよ。

S そうですねえ。あれは地方から来た人なんか泊まったりもしてたんですよ。やっぱり、卒業生ですよ。学生じゃないです。卒業生の会館ですよ。

I 当時の工学院の卒業生は、社会的にはどのように評価されていたんですか。

K 当時は学校が少ないから、工業学校というと今の電機大学？ 電機学校と、工学院しかないわけだね。その他に東京工科学校とか、それから徒弟学校というのがありました。

S やっぱり、工学院がいい学校ということになっていたから、私なんか東京工科学校の方が家に近かったのですけれど、無理して工学院に来たんですよ。

K 竹中工務店で重役をやっておられた瀬戸強三郎さんという人がいまして、何かにつけて愛校精神旺盛な方で、ある時、その人が私にね「きみ、時間のあるかぎり学校のお手伝いしなさい。」と言います。この人は明治10何年生まれて背の小さい人なんです、卒業してすぐアメリカへ行った

んですよ。設備を勉強してきたんですよ、竹中の方でも設備のエキスパートとして大切にされてきました。アメリカへ行ったそういう文化的な人が竹中だけじゃなく、よその施工会社にもたくさんいましたねえ。

S 私が、卒業する頃は、工学院出てきたということは、いい学校出てきたと言うことで社会的には相当認められていましたね。

S 工学院に来た人は向上心のある人が多かったね。

H 今日はお忙しい中を、長い時間にわたり、貴重なお話をしていただき大変ありがとうございます。今後共、我々後輩の御指導をお願いいたします。

略 歴

篠原梅吉

明治44年3月29日生れ

昭和6年2月建築科本科卒業

昭和6年～16年(株)小川建設勤務

昭和16年3月三菱地所株式会社建築部技師

昭和26年 篠原一級建築事務所設立、現在に至る

金尾武彦

大正11年3月1日生れ

昭和14年3月建築科卒

竹中工務店東京支店入社

同社設計部に勤務

昭和58年 同社定年退職

日本紙パルプ商事株式会社入社

現在に至る

聞き手 初田 亨 (昭和44年卒業)

岩田俊二 (昭和46年卒業)

平成2年12月20日

工学院大学にて収録

工学院大学建築設計教育の今昔そして未来

工学院大学講師 木村幸弘

建築設計教育、とりわけ工学院大学の設計教育は他大学にないユニークな存在になっている。その特徴は、大学院修士課程において計画専攻の修士論文に代わるものとして、プロジェクト作品が認められている点にある。美術系大学なら大方の理解が得られるようだが、工学系大学にある論文としては奇妙に思われるのかも知れない。

このような様相は学部においても反映されているように見える。端的に言えば、1991年度から始まる新しいコースとして、都市建築デザインコースが発足されたからである。一方これまでの建築学科は建築学コースとして継続され、これらをまとめて建築学科と呼んでいる。およそ理解できると思われるが、都市建築デザインコースはその名の通りデザインに主たる内容を持ち、建築学コースはデザイン系に対して工学的な技術に主たる重みを持つコースとすることができる。

以上は、現在の工学院大学建築学科のごく大ざっぱな概要であるが、その中で、建築設計が重要かつ主要な位置を占めていることは誰も否定しないであろう。私は1964年以来、およそ27年間にわたって、この建築設計教育に携わってきたが、この度、本誌編集担当の初田氏から原稿依頼されたこの機会に、建築設計教育について振り返りつつ将来の建築設計教育について模索できればと思い、首題について取り組んでみた。

私の就任当時(1964年)は、製図Ⅰ、製図Ⅱそして製図Ⅲの3科目であった。その概要は次の通り。

製図Ⅰの各課題と内容、(2年通年、必修)

No.1 オーダーコピー (製図、特にインキングの練習)

担当者は、堀越、山崎

No.2 住宅コピー (建築図面の理解とその製図法)

担当者は、平岡、保岡、武藤、山下。

No.3 住宅設計 (各室空間のとり方とつなげ方)

担当者は、波多江、武藤、荻原(吉原、椎名、中嶋)

No.4 レクリエーション施設設計 (特殊地形に建つ建物のプランニング)

担当者は、平岡、大庭、波多江、吉田(吉原、椎名)

No.5 集合住宅設計 (同ユニット建物のつなげ方)

担当者は、大庭、波多江、難波、吉田(吉原)

この課題の間に、1・2部、建築・設備コース共に、4つのグループに分けて即日設計が行なわれた。年間の授業は4月半ばから始まり、7月半ばから9月初め迄の夏休みがあって翌年の2月半ば頃までの期間に6課題が出題されている。担当教員は助手を除いて9人と兼任4人の13人で担当していた。学生数は200人位である。

製図Ⅱの各課題と内容(3年通年・必修)

No.1 公共サービス施設設計 (多人数を対象とするサービス施設のプランニング)

担当者は、荻原、山下(吉原、椎名、中嶋)

No.2 オーディトリウム設計 (多人数を収容する空間のプランニング及び構造、音響計画)

担当者は、波多江、十代田、荻原、望月(椎名、中嶋)

No.3 学校設計 (広い敷地における建物の配置の研究)

担当者は、武藤、荻原(吉原)。設備コースでは実施しなかった。

No.4 展示施設設計 (建物の内部における多人数の流れの処理、採光、照明計画)

担当者は、武藤、荻原(中嶋)。設備コースでは実施しなかった。

No.5 事務所または商店 (都市中心街における建物のプランニング)

この課題は、この年度には実施されていなかった。

製図Ⅱも製図Ⅰと同様に、上記の課題以外にも即日設計が行なわれていた。専任教員が7人と兼任2人の9人で担当していた。学生数はおよそ現役200人位であるが、再履修者が90人位いたから教

コース	曜日	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
製図	I	16 23 火 A1.1 沼田・豊田	7 14 21 28 火 A1.2 沼田・豊田	4 11 18 25 火 A1.3 沼田・豊田	2 9 水			5 12 19 26 火 A1.4 沼田・豊田	3 10 17 水		14 21 火	
	II	12 19 火 A1.1 沼田・豊田	10 17 24 31 水 A1.2 沼田・豊田	7 14 21 28 水 A1.3 沼田・豊田	3 10 17 水			4 13 20 火 A1.4 沼田・豊田	8 15 22 29 火 A1.5 沼田・豊田	6 13 20 水		10 17 24 水
第一	I	15 22 火 A1.1 沼田・豊田	6 13 20 27 水 A1.2 沼田・豊田	3 10 17 24 31 水 A1.3 沼田・豊田	1 8 水			7 14 21 28 水 A1.4 沼田・豊田	4 11 18 25 2 水 A1.5 沼田・豊田	2 9 16 水	13 20 水	
	II	11 18 25 火 A1.1 沼田・豊田	9 16 水 A1.2 沼田・豊田	6 13 20 27 水 A1.3 沼田・豊田	3 10 17 24 31 水 A1.4 沼田・豊田			7 14 21 28 水 A1.5 沼田・豊田	4 11 18 25 2 水 A1.6 沼田・豊田	1 8 15 22 水	9 16 23 水	30 水
製図	I	17 24 水 A1.1 沼田・豊田	8 15 22 29 水 A1.2 沼田・豊田	5 12 19 26 水 A1.3 沼田・豊田	3 10 17 24 31 水 A1.4 沼田・豊田			9 16 23 水 A1.5 沼田・豊田	6 13 20 27 水 A1.6 沼田・豊田	4 11 18 水	22 水	
	II	22 水 A1.1 沼田・豊田	13 20 27 水 A1.2 沼田・豊田	10 17 24 31 水 A1.3 沼田・豊田	7 14 21 28 水 A1.4 沼田・豊田			2 9 16 水 A1.5 沼田・豊田	14 21 28 水 A1.6 沼田・豊田	11 18 25 2 水 A1.7 沼田・豊田	9 16 23 水	30 水
第一	I	26 水 A1.1 沼田・豊田	17 24 31 水 A1.2 沼田・豊田	14 21 28 水 A1.3 沼田・豊田	11 18 25 2 水 A1.4 沼田・豊田			8 15 22 水 A1.5 沼田・豊田	5 12 19 26 3 水 A1.6 沼田・豊田	2 9 16 水	23 水	
	II	23 水 A1.1 沼田・豊田	14 21 28 水 A1.2 沼田・豊田	11 18 25 2 水 A1.3 沼田・豊田	8 15 22 水 A1.4 沼田・豊田			5 10 17 水 A1.5 沼田・豊田	12 19 26 3 水 A1.6 沼田・豊田	9 16 23 水	30 水	
製図	I	29 30 31 水 A1.1 沼田・豊田	20 27 3 水 A1.2 沼田・豊田	17 24 31 水 A1.3 沼田・豊田	14 21 28 水 A1.4 沼田・豊田			15 22 水 A1.5 沼田・豊田	12 19 26 3 水 A1.6 沼田・豊田	9 16 23 水	30 水	
	II	24 水 A1.1 沼田・豊田	15 22 29 水 A1.2 沼田・豊田	12 19 26 3 水 A1.3 沼田・豊田	9 16 23 水 A1.4 沼田・豊田			6 13 20 水 A1.5 沼田・豊田	13 20 27 水 A1.6 沼田・豊田	10 17 24 水	31 水	
製図	I	27 28 29 30 31 水 A1.1 沼田・豊田	18 25 3 水 A1.2 沼田・豊田	15 22 29 水 A1.3 沼田・豊田	12 19 26 3 水 A1.4 沼田・豊田			16 23 水 A1.5 沼田・豊田	13 20 27 水 A1.6 沼田・豊田	10 17 24 水	31 水	
	II	25 水 A1.1 沼田・豊田	16 23 30 水 A1.2 沼田・豊田	13 20 27 3 水 A1.3 沼田・豊田	10 17 24 31 水 A1.4 沼田・豊田			7 14 21 28 水 A1.5 沼田・豊田	14 21 28 水 A1.6 沼田・豊田	11 18 25 2 水 A1.7 沼田・豊田	9 16 23 水	30 水
製図	I	30 31 水 A1.1 沼田・豊田	21 28 3 水 A1.2 沼田・豊田	18 25 3 水 A1.3 沼田・豊田	15 22 29 水 A1.4 沼田・豊田			19 26 3 水 A1.5 沼田・豊田	16 23 30 水 A1.6 沼田・豊田	13 20 27 水	31 水	
	II	28 水 A1.1 沼田・豊田	19 26 3 水 A1.2 沼田・豊田	16 23 30 水 A1.3 沼田・豊田	13 20 27 3 水 A1.4 沼田・豊田			10 17 24 水 A1.5 沼田・豊田	17 24 31 水 A1.6 沼田・豊田	14 21 28 水 A1.7 沼田・豊田	9 16 23 水	30 水
行事予定	I	9 火 八学式	20 27 3 水 八学式	17 24 31 水 八学式	14 21 28 水 八学式			18 25 3 水 八学式	15 22 29 水 八学式	12 19 26 3 水 八学式	30 水 八学式	
	II	8 水 八学式	19 26 3 水 八学式	16 23 30 水 八学式	13 20 27 3 水 八学式			10 17 24 水 八学式	17 24 31 水 八学式	14 21 28 水 八学式	9 16 23 水 八学式	30 水 八学式

四十三年度 設計製図課題実施予定表

員の負担は多く、学生も大変だった。

製図Ⅲの各課題と内容（4年前期・選択）

A 小都市中心施設設計（一つの社会を対象にした建物群のプランニング）

担当者は、大庭、波多江、武藤、荻原

B 構造設計（構造計画、計算、図面作成の実習）

担当者は、横田、正木、十代田、望月

製図Ⅲは建築コースで実施され、設計事務所に就職する学生を対象とした。設備コースは無。

1965年当時製図担当した助手は足立、大森、南迫、鈴木、望月（大）そして木村の6人だったと思う。この当時の詳しい資料は殆ど残っていない。僅かに、学習便覧と昭和39年度の課題実施予定表の1葉が残っているだけである。

当時学生であった面々は、黒沢秀行君（内井昭蔵事務所）、竺覚暁君（金沢工大）、東正則君（工学院大）、安原治機君（工学院大）らがいる。特に、安原君には、即日設計における授業での恨み辛みか今でも語り草になっている懐かしい思い出がある。ちなみに、安原君の即日設計の採点は80点以上であったように思う。それでも恨まれたが、…ん！？！、俺もそうだったって。！？！

科目名が製図Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼ばれた時代は昭和42年度まで続いたが、42年度に製図Ⅳが新設された。この変更は設備コースとの相違を明確にするため、これまでの製図Ⅲを製図Ⅳ（選択）に変更して、新たに建築コースの3年次に製図Ⅱに並行して製図Ⅲ（選択）が加わるとともに内容も大きく変更になった。もう一つの変化は製図Ⅰ・Ⅱの必修科目は建築・設備コースともほぼ同様の内容として予定を組んだことである。これによって性格づけは明確になったが、設備コースの製図科目の優秀な学生が不満を持つようになった。同じ土俵で、かつ同じ教師スタッフであったことなどを背景として、学生にとってはこれが“差別”と映り、建築コースへの転コースを希望するという状況に陥ったのだった。

実は、昭和42年度には教師スタッフにも移動があった。それは平岡先生が逝去され、堀越、保岡先生たちから若い先生方へと代変わりしていった事も大きな要因であったように思う。若い専任スタッフとして、昭和41年度に中嶋(泰)先生と足立先生が、昭和43年度には南迫先生、そして、兼任

では広部、下山先生らが初参加してきました。また、42年度までの助手の参加状況は予定表などの記録がないので明確ではないが、鈴木、大森、望月(大)、直井、豊田と木村の6人だったように思う。

昭和42年度の建築設計カリキュラムは、以上のような意味で一つの転換期を向かえたと言ってもよいのではないかと思う。設計教育に関する試行錯誤はさらにつづいた。参考に昭和43年度の課題予定表を示すとしよう。このプログラムの原型は昭和42年度から始まったのだが、これまでのオーダーコピーは廃止してしまった。昭和42年度の製図第一の内容は、No1.1木造住宅コピー、No1.2透視図、No1.3住宅設計、No1.4鉄筋コンクリート造コピーとなっていたが、昭和43年度には透視図が廃止され、コピー課題と設計課題とが関連づけられて実施される様になった。

製図第一の内容は

No.1. 1 木造コピー

No.1. 2 住宅設計

No.1. 3 鉄筋コンクリートコピー

No.1. 4 集合住宅設計

と改められた。このスタイルは建築設計第二と科目名が変更になってからも継承され、昭和57年度までの足掛け15年におよぶ長きにわたって実施された。一方、製図第二は昭和42年度に一定の形式を整えていた。

製図第二の内容は

No.2. 1 学校設計

No.2. 2 OFFICE BUILDING 設計

となっていた。この課題内容は昭和47年度まで5年間続いたが、設備コースが廃止されると同時に変更されることになった。昭和48年度からは建築設計第三と科目名が変更され、これまでの通年科目が三年前期（必修）と三年後期に建築設計第四（選択）とに分かれて行くこととなった。

この様な科目の変動に伴って、教員の担当にも移動、増員等の手当がなされた。兼任講師は昭和38年度まで吉原先生1人であったが、昭和39年度からは椎名、中嶋(泰)先生が加わり、昭和41年度からは下山先生が加わり、都合5人と増強された。その後、中嶋先生が専任講師となった。製図担当の助手も、昭和39年当時は私(木村)1人であったものが、40年度に直井、そして41年度には

豊田君が加わり三人で担当する様になった。その後、製図教室というセッションが確立して、昭和47年度からの設備コース廃止に伴い、3年次に計画、構造、生産及び設備の4つの専攻選択制が実施されて二度目の大変革となった。

この変革に伴い、科目名は建築設計第一、第二、第三及び建築設計演習第一、第二と変更になったが、昭和49年度からは選択科目の建築設計演習第一と第二が、建築設計第四、第五と改められた。さらに昭和60年度に、建築設計第二が6単位となり、木造コピーとRCコピーとが集中授業となって授業日が独立して構造、設備等の技術的な学習に力点が置かれるようになった。

設備コースが廃止されて、建築学科は一本化された。昭和49年度に名称変更された建築設計のうち設計第一は表現技法の習得を目指した。

設計第一の内容は

- No. 1 - 1 ドローイング (鉛筆画)
- No. 1 - 2 セクションパース (インキング)
- No. 1 - 3 外観パース (彩色)
- No. 1 - 4 模型制作と写真撮影

当初、この科目は、1部は鈴木達己先生、2部は北沢興一先生が主に担当していた。

建築設計第二は住まいの設計を主要なテーマとして、木造とRC造の規模的構造特性を加味して機能と空間と材質等の統合の修得を目指した。

設計第二の内容は

- No. 2 - 1 木造住宅コピー
- No. 2 - 2 住宅設計
- No. 2 - 3 鉄筋コンクリートコピー
- No. 2 - 4 共同住宅設計

である。このほかに、短期設計が二課題出題された。この科目の担当者は、専任教員は波多江、武藤、荻原、山崎、山下、足立、南迫、鈴木(達)らの先生方と、兼任講師は奥村、佐々木、田島らの先生方が担当していた。

建築設計第三は、住環境の主要な公共施設であり、また伝統的な課題の『小学校設計』を中心にセットして、組織的かつ社会的な比較的規模の大きい多機能施設のまとめ学習を目指した。

設計第三の内容は

- No. 3 - 1 小学校設計

このほかに、短期設計が一課題出題された。以上の設計第三までは必修科目であった。この科目の担当者は専任教員は荻原、武藤、足立、南迫らの

各先生方と兼任講師は奥平、小沢、下山、田島らの各先生方が担当していた。

建築設計第四は、選択科目であり、小学校以外の公共建築を主要課題として将来建築設計を志す学生を対象とした。小人数教育を実施するため6人の教員がそれぞれに出題し、学生はその中から二題を選択し学習するという新しい教育システムが実施された初めての年であった。

設計第四の内容は

- No. 4 - 1 市庁舎の設計
- No. 4 - 2 図書館の設計
- No. 4 - 3 美術館の設計
- No. 4 - 4 小病院の設計
- No. 4 - 5 低層集合住宅の設計
- No. 4 - 6 大学セミナーハウスの設計

である。この科目の担当者は、専任教員の波多江先生がコーディネーターとして参加し、あとの5人の兼任講師は佐々木、山岸、奥村、奥平、小沢らの先生方。さらに、専任の設備担当として中島先生と構造担当として望月洵先生が参加していた。設計第四は、計画系の学生に重点が置かれていたが、構造、生産、設備系の学生及び2部の学生についても同様に開講されていた。

建築設計第五(選択・4年前期)は昭和50年度から実施された。この科目は卒業計画の前哨戦として、または卒業後に設計事務所に就職することを前提として、学生3から4人がチームを組んで協同制作することを条件に、地区計画およびその地区内の施設を計画・設計するという企画構想の立て方とチームワークのあり方を体験学習することを目指して実施された。

設計第五の内容は

- No. 5 - 1 相模原市米軍跡地の利用計画

であった。当時、相模原市役所の職員に本校の卒業生がおられて、資料等の提供など協力してもらった記憶がある。昭和50年度以来、現在に至るまで、この科目は足掛け16年に亘ってつづいている。その間、課題の内容はさまざまに変化しているが、指導する教師にとっても非常に興味深い科目であり、今後とも維持されるであろう。

この科目の担当者は、専任教員は波多江先生と中嶋先生が、そして兼任講師は山岸先生が担当した。昭和47年度から始まった建築設計の教育体制はほぼ今日まで及んでいるが、この体制が一巡し

昭和50年度建築設計予定表

課題説明

 提出日

 講評及課題説明

 講評日

科目	部	ノ	ノ	日	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
建築設計第一	一	I	金	日	3	17 24	7	14 21 28	5 12 19	9 16					
					1-1	1-2	1-3	1-1							
建築設計第一	二	II	土	日	4	11 18 25	8	15 22 29	6 13 20	10 17					
					1-1	1-2	1-3	1-1							
建築設計第一	一	I	水	日	15	22 29	5	12 19	3 10 17	14 21					
					1-1	1-2	1-3	1-4							
建築設計第一	二	II	土	日	16	23 30	6	13 20	4 11 18	17 24					
					1-1	1-2	1-3	1-4							
建築設計第一	一	I	火	日	9										
					1-1	1-2	1-3	1-4							
建築設計第一	二	II	水	日	10										
					1-1	1-2	1-3	1-4							
建築設計第二	一	I	金	日	18	25	2 9 16 23 30	6 13 20	5 12 19	16 23					
					2-1	2-2	2-3	2-4							
建築設計第二	二	II	木	日	17	24	1 8 15 22 29	5 12 19	4 11 18	17 24					
					2-1	2-2	2-3	2-4							
建築設計第二	一	A	水	日	16	23	7 14 21 28	4 11 18 25	3 10 17	16 23					
					1-1	1-2	1-3	1-4							
建築設計第二	二	B-C-D	金	日	18	25	2 9 16 23 30	6 13 20	5 12 19	16 23					
					1-1	1-2	1-3	1-4							
建築設計第二	一	A	月	日	21	28	12 19 26	9 16 23	8 15 22	19 26					
					1-1	1-2	1-3	1-4							
建築設計第二	二	B-C-D	火	日	5	12 19 26	2 9 16 23	1 8 15 22	4 11 18	25 32					
					1-1	1-2	1-3	1-4							
建築設計第五	一	金	日	日	18	25	2 9 16 23 30	6 13 20	5 12 19	16 23					
					1-1	1-2	1-3	1-4							
建築設計第五	二	水	日	日	16	23	7 14 21 28	4 11 18 25	3 10 17	16 23					
					1-1	1-2	1-3	1-4							
行事予定	一	部	日	日	15										
					1-1	1-2	1-3	1-4							
行事予定	二	部	日	日	24										
					1-1	1-2	1-3	1-4							

た昭和50年度の建築設計予定表をここに示して、昭和43年の予定表との比較をして、その発展ぶりをみていただこう。

昭和50年度モデルが、今日に至るまでに幾つかの変更があった。その根底にまた幾つかの問題点もあった。最大の問題点は、建築学科一学期で300人を超える学生数がマスプロ教育という悪い印象を与えていること。これに対して、われわれ教員は3年次の専攻選択（計画、構造、生産、設備のいずれかの専攻を選ぶ）することでマスプロ教育という問題から避けられると考えたのであるが、社会一般には理解しにくい。一方、受験生の偏差値は最近下がっている。以前は、本校の建築学科は理科大と同等のレベルにあったが、最近は、一ランク下の位置に落ち込んでしまった。そこで、我々は数年前から議論を重ねた結果、冒頭の新コースの誕生となった。しかしながら、将来の展望は必ずしも明確に把握されていない。そこで、個人的な見解ではあるが、また、ご批判を受けることを覚悟の上で、私の考え方を述べて見たいと思う。

人間生活の基本的な条件は、衣食住という自然的物理的条件を背景としながら、人々の趣味・遊びや祈り・祭り等の精神的心情的な行為が反映していると考えることができる。とりわけ衣食住という自然的物理的条件は人間生活の程度を計るバロメーターとして見ることができる。

建築とは、人間が創るものであり、生きるための環境づくりのための総称である。この観点に立つとき、人間の生活環境とはいかにあるべきかという哲学が必要になってくる。上述の人工的環境は文明的側面と、精神的な文化的側面との両面問題として考える事ができる。しかしながらこれらの両側面は、実質的な表現として、一側面だけでは存在し得ない。われわれの創造物は物・心一体の生命的存在であると思う。

人類は、人間存在のために、自由勝手に自然環境に依存してきたが、人口増加につれて衣食住の不足分を補うべく自然環境に効果的に働きかけ、自らの手で生産行為を行なう様になったと考える事ができるであろう。

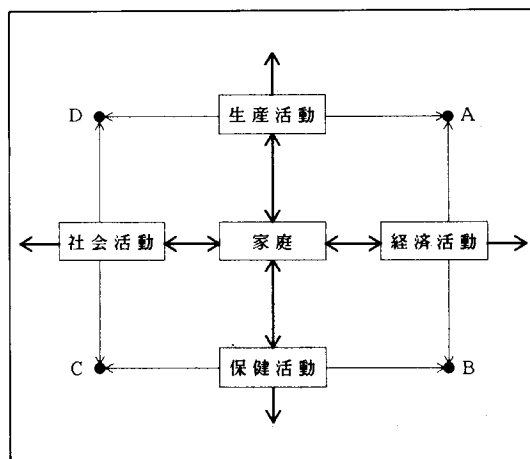
人間の生活環境は一つのシステムである、と考えるとき、生活の物的条件であるシステム要素は人類が求めるところの「生産物」である。この物

的要素に対して、人的要素は人間自身の各種生活によるシステム要素である。人類は、狩猟採集の時代には、家族という最小限の単位でもって生活維持する限りこれで十分であった。人口増加に伴って家族間の交流が盛んになり物品の交換取引などが行なわれると、物品の代価つまり「貨幣」が発生する。この「貨幣」は、第二の物的要素であり、経済活動を促進するシステム要素である。そして家族規模の人間集団が益々増大すると、「生活共同体」としての相互扶助のための社会活動が必要となるであろう。この「生活共同体」は、第二の人的要素であり、社会活動を展開するシステム要素である。これらの要素の行動を一つにまとめて、次にそれぞれの機能を定義すると、

- F 1 = 人間生活に必要な物品の生産 — 生産活動
- F 2 = 余剰産物の交換交流等の取引 — 経済活動
- F 3 = 人間個体維持の為の健康保全 — 保健活動
- F 4 = 人間相互扶助の為の地域活動 — 社会活動

という基本的な4種類の機能として表される。私は、これらの機能を、生活空間の「原機能」と呼んでいる。これらの原機能は「家庭」を原点とする2次元の座標空間に展開することができる。これを図式化すると、下図のように表現することができる。

第3図は人間の生活空間システムを端的に表す構造形式である。人類は、原始社会においては点A、B、C、Dに位置すべき情報も技術も持っていなかったが、現代社会では互いの活動を媒介する施設、つまり生活環境を整備する情報と技術を発展させ、結果としてゆたかな生活空間を獲得し



第3図 人間環境システムの空間形式

てきたのだと……。しかしながら十分に賢い人類と、私はおもっていたのだが……。湾岸戦争に見るように、人類はまだまた愚かな動物、苦勞して築いた環境を破壊しあっている。これも、新しい環境造りの営みか……。??。

主題は建築設計教育だが、建物その物も重要だが、その背景を無視して、個人的趣味、若しくは専制的に走った建築設計は、やがて、都市・街ともども破壊されることになるのかも知れない。湾岸戦争はともかくとして、第3図の構造形式上に具体的に生活環境の各種施設を展開すると、第4図のように表現できた。

終わりに臨んで、十分な考察ができたとは思わないが、将来に向けてまとめてみたい。第4図はじつは、時間軸の横断面を表したに過ぎない。時間軸についての詳しい考察は省略するが、上述の生活空間システムのシステム要素と4つの原機能の定義にいたるまでが、おおまかな時間軸にかんする考察である。少なくとも私は、建築設計教育は上述のフィジカルな論理をもとに、各種建築の哲学的な位置づけ、人間自身の生活空間に対する建築的表現を学習しながら、建築的理想像を構築する手法の修得、を指導することと考えたい。ふたたび教育とは、指導する者、される者との関係構造の内にあるものだが……。

(昭和39年卒業)

築地そして新宿の今昔

－工学院大学学園の発展－

建築学科同窓会副会長 小高 鎮 夫

－築地－

工学院大学学園発祥の地、現在の中央区築地7丁目8番地は、同区の南西部の隅田川西岸の地域で、江戸時代、振袖火事として名高い明暦の大火事（1657年1月18日）後に焼土を利用して木挽町海岸より埋め立てて築いた土地（築地の名の由来）である。又明石堀を越えた対岸の明石町は元禄時代（1688～1704年）には赤穂の城主浅野匠頭、の江戸上屋敷があり、附近は諸大名の屋敷や町屋のあった所である。現在は聖路加国際病院の建物が立っており、明石堀は公園になっていて今はない。明治になって、明石町は官有地となり、明石町名はその時抹消される。そして明治元年に開設して明治32年に廃止するまで、横浜との航海に便利な“築地外人居留地”として、米・英・独・仏などの各国の商事館やスペイン、アメリカ、ブラジル、スウェーデン、スイス、アルゼンチン、ペルー等の公使館が開設された。外人居留地廃止以後も関東大震災後に各国の公使館が他の場所に移転するまで、異国情緒のあふれる街として知られていた。明治初年における治外法権の地区である築地居留地は東京におけるキリスト教の重要な拠点でもあり、ミッションスクールなどが立ち並ぶ学校の町でもあった。明治7年には現立教大学が創設され、明治学院、青山学院、双葉学園、女子学院、その後に関東学院などこの明石町で開校した。しかし、治外法権のためにアヘンの輸入や、外人による不正取引のトラブルが絶えず、又横浜との2極化貿易であったこともあり、居留地政策自身は失敗であったと云われている。

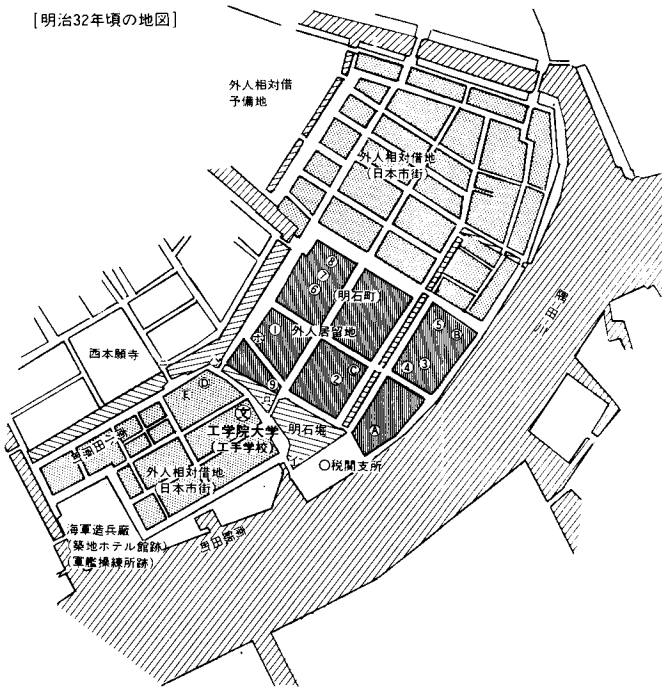
一方明石町の対岸である工手学校開校の地、南小田原町（現在は築地）は外人居留地の一種であ

る相對借り地域であり、工学院大学学園発祥の地記念碑のある地にフランス公使館、隣接地には英国公使館が開設された。勝海舟で名高い旧軍艦操練所跡地には江戸幕府により計画された、和洋折衷の築地ホテル館は米国人プリンジンス設計監理、清水建設（当時は清水屋その後清水組）の施工により建設され、慶応3年7月起工、慶応4年（明治元年）8月に招工した。江戸城に次いで高層な近代建築物であった。その跡地は、海軍用地となり、海軍造兵廠が置かれ、明治7年1月に海軍経理学校が移転し、戦後は現在東京都中央卸売市場となっている。明治始めの頃の東京下町の話は「居留地の異人の話」と、文明開化の象徴でもあった「築地ホテル館」であった。

明治21年2月（黒田清隆内閣の時）本学園の前身の工手学校は、始め木挽町の農商務省内徒弟講習所の一隅を借り受けて開校したが、同年9月8日に南小田原町4丁目（現在築地7丁目）に、三浦微氏の持家を借りて、ヘンリー・フォールズ博士が明治8年5月22日に開設した“築地病院”の建物を、博士が本国に引き上げて閉鎖していた所を購入し、新校舎（学校敷地506坪1合、校舎総坪数366坪7合4才）を建設し移転したのである。ヘンリー・フォールズ博士は英国人宣教師で、西洋外科医としての評判が高く、又眼科の治療を受ける者も多く、盲人教育の推進（明治5年には日本人は人口400人に1人が盲人との報告がロンドンでなされている）を行ったことでも名高い。又古くからあった日本の指印の習慣からヒントを得た指紋法の基礎を作った。指紋研究に必要なしかも日本の病院や医学校でも初めてといわれる死体解剖はここでなされたのである。

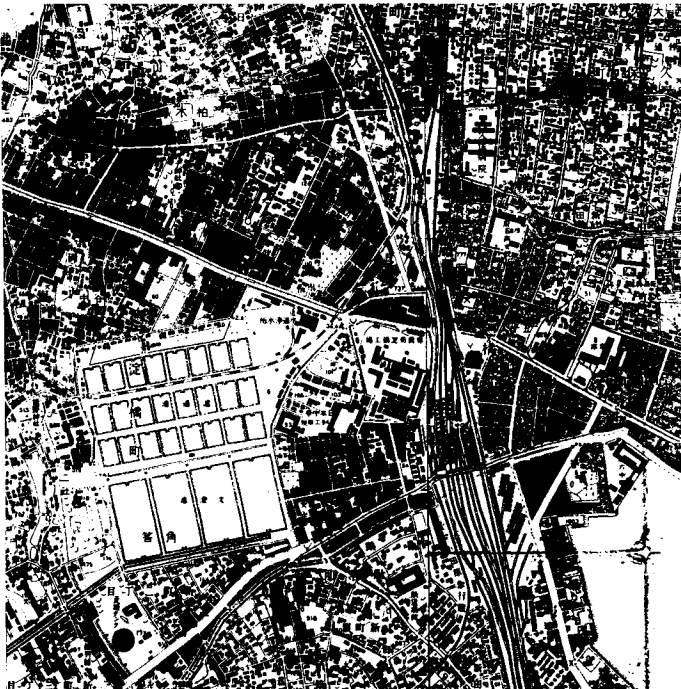
外人居留地(居留地と相対借地) (明治33年に廃止)

[明治32年頃の地図]



- 1 立教学院(立教大学校・立教中学校)
- 2 " (立教女学院)
- 3 明治学院(一致英和学院)
- 4 " (一致神学校)
- 5 青山学院(海岸女学校)
- 6 関東学院(東京中学校)
- 7 双葉学園(英地語学校)
- 8 女子学院(新栄女学校)
- 9 慶應義塾跡
- A 米国公使館跡
- B スイス公使館跡
- C スウェーデン公使館跡
- D フランス公使館跡
- E イギリス公使館跡
- イ 明石橋
- ロ 新栄橋
- ハ 栄橋
- ニ 備前橋
- ホ 浅野内區頭拒屋敷跡

工手学校遊橋新校舍完成(昭和3年)校名を工学院に改称



大正12年関東大震災により築地校舎全焼
昭和3年新宿遊橋に新校舎落成、
校名を工手学校から「工学院」に
改称。

四谷・中野 昭和3年修正6年制分館正

関東震災の跡も復興と並んで従来の停車場が一つにまとめられたのは、大正13(1924)年7月、その12月には本館1(四谷)に代りして青橋1(西谷)も設けられ、専ら給電車と入線には乗務員になった。14年4月26日山手線開通工事の完成と共に、新宿駅駅舎の落成式も行なわれ、大正14年までの計画に即した、青橋街道のガードをくぐりぬけた西武軌道は、新設された本線1(東口)南東15年9月5日延長され、13年3月1日新まで延長された市定との連絡が便利になった。青橋街道踏切跡には、昭和2(1927)年地下道が設けられ、東西の交通の利便が図られた。京王電鉄は、奥橋が大正14年コクリン線開通になった際、伊用軌道とし、新宿終点を昭和2年10月28日本社1線の四谷新宿(後に京王新宿と改称)に変更した。小田急行電鉄は、昭和2年4月1日新宿から小田原まで一線に開通し、西口に沿って新宿駅が開業した。

明治5年2月26日に発生した火災は銀座街を焼失し、築地方面を延焼し、築地ホテル館も類焼した。時の由利公正（キミマサ）東京府知事は銀座全滅の不燃性建築を企画し、政府に対して国費をもって明治10年迄に煉瓦造2階建アーケード式洋館を完成させた。又明治5年9月には、横浜～新橋間で鉄道が開通し、7年にはガス燈が煉瓦街にともった。丁度この頃の築地居留地は、東京の中での外国のたずまいを見せ、日曜日の朝には教会から、ピアノの音や賛美歌のコーラスが流れ、午後には低い垣根越の芝生ではクリケットを楽しむ姿が見られたという。

築地はこの様に、政治・軍事・文化・教育・宗教・建築・病院・科学そしてホテルなど、どの分野を見ても文明開化の政策による日本の黎明期の中心であった。この様な環境の中で、日本が工業立国をめざす国策色の濃い中堅技術者養成の学校として、工手学校は開校したのである。その学園に関係のある榎本武揚子爵は築地1丁目に住み、芥川龍之介の誕生は明石街11番に当る。なお明石町には、先の各学校跡地の他に慶応義塾・蘭学事始・電信・指紋研究等の発祥の碑があり、小田原町には、海軍経理学校・日本海軍発祥の碑などあって当時を想い知ることが出来る。大正12年9月1日正午頃発生した関東大震災は小田原町においては午後8時30分頃、新橋方面よりの飛火で焼失したと云う。そのため、工手学校はこれを契機に、新宿淀橋の現在地に移転した。工手学校跡地には築地本願寺内に創立された和光童園が移って来た、そこは現在日刊スポーツ印刷社となっており、築地7丁目8番地であるが当時は南小田原町4丁目8番地であった。隣接地南小田原町4丁目1番地木村屋コーポビルの一隅に、工学院大学学園発祥の碑が設置されている。昭和7年に南小田原町は小田原町に、昭和41年には更に築地6、7丁と町名が変更された。又築地居留地は明治32年9月に条約改正で居留地制度が廃止した後、京橋区明石町と呼ばれるようになったのである。

一新宿一

今新宿は交通の要、新宿駅を中心として、伊勢丹、三越デパートを持つショッピングセンター、映画街を含めた歌舞伎町のあるアミューズメントセンター、明治神宮のスポーツセンター、新宿御苑や新宿中央公園のグリーンパーク、そして超高

層の林立する新宿西口のオフィスセンターがお互いに関連しあっている。このように新宿の中心部は、新宿区、杉並区、渋谷区、多摩ニュータウン及び光ヶ丘団地を後背地に抱き、それぞれ異なるコミュニティーに属する人間同志の交流する、「多心型都市構造」の街として21世紀へ向けて限りない発展の可能性を秘めているのである。中央・山手線のJ R、丸の内線・東西線・新宿線の地下鉄、小田急・京王・西武線の私鉄、そして青梅・甲州街道、等の交通網により人々は絶まなく流動している。平成三年春に完成を目指す新都庁舎に対し、一年遅れに完成を見る工学院大学高層学園エステック街区は新宿新都心の正面に位する。そして新大学棟、それに続いて建設されるオフィス棟とのツインタワーの連動は、この街区の持つパーソナリティー、「近代的情報都市」、即ちハードからソフトへの新たな機能を持つ特定街区として完成する。街区内のハード空間の一体化は同時にソフト空間の一体化も意味する一つの新しい都市空間であり、産学協同のこの都市空間の歴史的意義は大きい。

新宿、この名称は今より300年前の1698年（元禄11年）に、徳川家康の家臣、内藤氏（現在の新宿御苑はその屋敷跡）の土地の一部に宿駅が開かれ、内藤新宿と呼んだ所より来ている。当時は品川、板橋、千住と並び、江戸四宿の一つとして栄えた。明治18年3月、日本鉄道（株）により赤羽と品川間が開通し、甲武鉄道（株）が同22年4月、新宿と立川間を開通する。当時は1日4往復程度の東京郊外の田舎駅に過ぎなかった。明治28年には飯田橋駅迄開通し、明治39年11月1日に国有化し中央線となり、大正8年には東京駅まで開通した。中央線は当初の計画では新宿から青梅街道に沿って西下し青梅に至るルートであったが、創成期の鉄道建設につきもの、汽車の排煙によって火事が起る、汽車の通過の音で牛・馬があばれる、又牛乳の出が悪くなる、などの沿道住民の反対運動により計画を変更し、街道筋をさけて新宿から北西に大きくカーブし一直線に立川に至る路線になったのである。

大正12年9月、関東大震災により、築地より豊多摩郡淀橋町大字角筈に移りまず日本中学校を仮校舎として、隣接地に昭和3年4月、3階建新校舎の落成を見た工手学校は、校名も工学院と改め、淀橋浄水場の正面に鉄筋コンクリートの近代ビルの偉様を誇った。浄水場の予定地は始め千駄ヶ谷であったが、人家を離れ土地の高低の程度より現

在地となり1889年（明治31年）12月に、それは丁度工学院大学校友会（当時は工手学校同窓会）の創立の一年前の年に完成した。当時の新宿は本学園のみならず震災を契機に今迄人口が飽和状態であった下町の中でも、特に上流の人達が移り住み、新宿を中心に山の手文化が栄えたのであった。なお東京市は、工学博士古市公威氏（工手学校第2代管理長）に、浄水場設置に対する委嘱をした。又昭和48年3月浄水場跡地処理の時、校友伊藤眞治氏（当時工学院大学評議員議長）の努力により、約400坪を購入でき、工学院大学学園の校地が4面道路に接し、単独で特定街区を申請出来ることが可能となったことは忘れてはならない。

昭和40年東村山浄水場に移転した淀橋浄水場跡地利用の高層ビル群は昭和46年の京王プラザホテル、昭和49年の新宿住友ビルと年に1つ程度の割合で建設されており、平成3年春の都庁舎の完成で一連の計画は終わる。新都庁舎には知事以下1万3千人が入居し、関係自治団体や出先の職員等が1万人、一般都民の来庁者が1万人と合せて3万3千人の出入が想定される。そして都民広場、野外劇場やカフェテリアが造られ、丸の内とは違った意味の住民を巻き込んだ新たな都市空間、それは21世紀に確実にやってくる新人類、新女性群によって活気あふれる空間を構成するに違いない。

都庁移転に伴い、地下鉄丸の内線の（仮）成子坂駅新設、磁気力で走行するリニヤモーターの都営地下鉄12号線の（仮）西新宿駅（仮）北新宿駅。そして平成3年に着工予定の新宿～丸の内をダイレクトに結ぶ地下「弾丸鉄道」によって、丸の内との新たな「業務核都市」が整備され、都心機能の分散、広域化がなされる。更に注目しなければならないのは東京～大阪を1時間で結ぶ中央リニヤ・エクスプレスである。この停車予定駅は、大阪、亀山、名古屋、多治見、飯田、甲府の各市であるが、中央リニヤを迎える東京のキーステーションが新宿となれば、新都心に与えるインパクトは一層高まるに違いない。

新宿新都心は第2次高層ビル群建設時代にはいろいろとしている。今急務なのは、車社会から人間中心の社会いわゆる物中心から心を重要視する人間復活をめざすに必要な新宿西口駅前再開発であろう。駅前広場で人の流れが“緑”と“花”と“彫刻”と“水”と“光”を通して高層ビル街へ向かう姿を想像しよう。又、博物館、美術館、音楽ホー

ルを持つビルも一つぐらいあっても良い。地下道は楽しいショッピング街で明るくあってほしい。30年程前の私達学生時代に上野の森の環境を新宿への構想で淀橋浄水場跡地及新宿西口再開発計画として“新宿西口文化センター”を学祭に発表（昭和33年の校友会報22号掲載）した当時の頃を思いだす。

平成4年に完成するエステック街区は単なる一街区計画で終わることなく、新宿新都心の“核”となって社会へのかゝわりを持ち、工学院大学学園がエステック街区の他の構成メンバーである第一生命と日本生命と共に社会へ開かれた学園として、明日の新宿の街づくりにも積極的に参加できる組織体をつくることもまた重要な課題ではないかと思われる。21世紀へ向けて工学院大学学園の一層の発展を期待しよう。

（昭和34年卒 工学院大学校友会

創立90周年実行委員会副委員長）

注1 居留地とは、中国における租界（19～20世紀の中国で自国の行政権が失われた地域）と同様に外国人の居住・営業を許可した特別な地域で、日本では外人相対借地（日本人が建物を建築し外国人商人に借家できる居留地）も含めての総称である現在の明石町は純然たる居留地であり、工手学校のあった南小田原町は外人相対借地であった。

注2 文中本学園の発足当初“農商務省内徒弟講習所”の一隅を借り受けの所は工学院大学学園75年史では“東京商業学校付属商工徒弟講習所”を借り受けてとなっている、なお、一橋大学の年史ではその頃は高等商業学校付属工徒弟講習所と改称している。

注3 エステック（STEC）街区はShinjuku Techno Campusの略である。

注4 中央区立京橋図書館郷土資料室には築地や工手学校に関して興味深い資料を散見することができる。

参考資料

私達の町 築地六丁目七丁目明石町（築地六・七丁目明石町記念誌発刊委員会）

築地明石町今昔（北川千秋著）

憶い出すことどもー明治大正時代の南小田原町

（乾達雄）

中央区の歴史（北原進）

世界の新宿ー21世紀のスーパーシティー

（KK日本地域社会研究所）

ウィークスー新宿ー（日本放送出版協会）

鉄道と街・新宿（三島富士夫・生方良雄著）

工学院大学学園75年史

建築学科創設三十五周年記念祝賀会を終えて

平成2年11月26日(日)建築学科創設35周年記念祝賀会が、式典を新大学棟3階、祝賀会を京王プラザホテルエミネンスホール5階で、約600名の出席の中を盛大に又、なごやかな中に活気に満ちた一時を過ごす事が出来ました。式典においては開会の辞に続いて、中島康孝記念実行委員長の経過報告のあと、功労者感謝状贈呈(功労者名後記)・来賓祝辞そして今回は特に「エステック計画と工学院大学の展望」・松浦隼雄工学院大学開発本部長と、「工学院大学建築学科教育の歩み」・波多江健郎工学院大学建築学科教授の、工学院大学の将来について感銘深い二つの記念講演があり、午後6時より祝宴に入りました。

祝宴は、高山理事長、北郷学長を始め、学園理事、他学科主任教授そして木下日本建築学会々長代理、竹中建築業協会々長その他来賓の方々のご列席、又建築学科教職員や、卒業生・各企業参加者の出席などで、会場は午後6時から午後9時迄、夜の更けるのも忘れての懇親が続きました。途中より、35年間に渡るなつかしい先生方、思い出深い学園の施設のスライドが上映され、芦原義信前日本建築学会々長の飛入りの挨拶も又印象深く、会場の各所では記念撮影が始まり、宴の始めから続いたジャズの生演奏も又、一層はなやかな盛り上がりを見せ成功裡に、創設35周年記念祝賀会の

幕を閉じました。なお、当日は新大学棟9階にて各種展示・作品展も開かれました。

丁度10年前の昭和55年11月3日は“建築学科創設25周年記念祝賀会”が京王プラザ南館の同じエミネンスホールで450名の出席をもって行われました。そしてこの新宿西口は現在新都庁舎を迎えその発展は想像を越えております。

本学園も新大学棟が1昨年(平成元年)に竣工、平成4年9月の完成を目標にオフィス棟・中層棟の建設と“エステック街区”を構成する高層学園の都心型大学へと21世紀へ向けて学園の総力で前進している姿に時代の大きな流れを感じます。

今回の35周年は同時に2つの大きな協賛事業が企画されております。(A)は建築学科創設35周年記念誌発刊、(B)は工学院大学建築学科奨学基金の充実であります。(A)につきましては、新制大学の建築学科創設時の貴重な資料が松本与作先輩の遺族のご好意で入手出来た事も併せ本学科の新たなる発展に入る35年間を記録、保存しておく事、又今回の記念祝賀会の内容を次々に伝える事、現在の研究室の現状を卒業生の皆様にとって頂く事で、35年の節目を“年誌”として残そうとするものであります。(B)につきましては、25周年記念の協賛金と、教職員のご寄付をもって昭和57年度より「建築学科記念奨学金」の名称で100万円よりスタートをし、その後同窓会の協力をもって500万円で現在建築学科在籍生のうち、優秀なものに数名年一回給付しております。その奨学基金を更に充実させる目的であります。卒業生の皆様のご協力と、建築関係を中心とした各企業の協賛広告の内からの充当で現在300万円程度基金の追加が見込まれておりますことは誠に感謝に耐えません。

昭和24年4月、工学院大学が新制大学として発足し機械工学科と工業化学科が創設されました。続いて昭和30年4月に電気工学科と建築学科が創設をし、今の四学科の基礎が出来上がったのです。当時の教育の専任スタッフは「建築学科25年の歩



み」によると、天野太郎、下元連、鈴木鎮雄、十代田昭二、平岡正夫、堀越三郎、正木三省、山崎弘の各先生方であります。現在、十代田、正木、山崎先生が現職としてご活躍であります。

現在卒業生は約10,000余名で、日本建築界の中堅として、“誠実努力”の学園の校風そのままの堅実型で建築業界ではかなり高く評価されております。都心型大学として新たなる建築学科及び卒業生像の創造をもって次回の“建築学科創設記念祝賀会”を迎えることが出来る様、又、建築学科同窓会の協力が今後共維持発展してゆく様期待する次第です。

(功 勞 者)

- 横 田 道 夫 工学院大学名誉教授
- 吉 田 辰 夫 工学院大学名誉教授
- 伊 藤 鄭 爾 工学院大学教授
- 波多江 健 郎 工学院大学教授
- 大 庭 常 良 工学院大学教授
- 正 木 三 省 工学院大学教授

- 鈴 木 昇 太 郎 (社)工学院大学校友会相談役
(創設時・建築学科設置促進会副委員長)
- 伊 藤 真 治 (社)工学院大学校友会相談役
(創設時・新学科設置後援会副会長)
- 小 高 鎮 夫 工学院大学建築学科同窓会副会長(初代・第3代建築学科同窓会会長)
- 金 田 昭 治 工学院大学建築学科役員
(第2代建築学科同窓会会長)
- 金 尾 武 彦 工学院大学建築学科同窓会副会長(第4代建築学科同窓会会長)

※建築学科創設35周年記念会誌(送料共4千円也)をご希望の方は、総会通知の通信欄に“記念誌”申し込みと明記して下さい。

(建築学科同窓会副会長
記念事業実行委員 小高鎮夫記)



第24期(1989年)一般会計報告

(単位:円)

予 算		決 算	
収 入	支 出	収 入	支 出
1) 前年度繰越金 779,534	1) 会誌発刊費 1,170,000 ① ニッチNo.13印刷費 940,000 ② 編集費 200,000 ③ 雑費 30,000	1) 前年度繰越金 779,534	1) 会誌発刊費 1,167,632 ① ニッチNo.13印刷費 940,412 ② 編集費 200,000 ③ 整理費 10,000 ④ 賛助金振込手数料 17,220
2) 会費 1,593,000	2) 各部会費 120,000 ① O B援助費 120,000	2) 会費 1,544,000	2) 各部会費 76,388 ① O B援助費 76,388
3) 総会発送援助費 670,000	3) 同窓会名簿整理費 1,000,000 ① 1990年名簿印刷費 96,000 ② 整理費 20,000 ③ 郵送費 20,000	3) 総会発送援助費 652,880	3) 同窓会名簿整理費 1,200,190 ① 1990年名簿印刷費 1,058,243 ② 整理費 107,687 ③ 郵送費 34,260
4) 雑収入 1,700,000 ① 同窓会名簿売上 600,000 ② ニッチ賛助金 1,000,000 ③ ニッチ広告料 100,000	4) 準会員援助費 0 5) 総会費 2,330,000 ① 総会通知印刷費 350,000 ② 総会通知発送費 1,900,000 ③ 懇親会費 50,000 ④ 雑費 30,000	4) 百周年募金運動 援助費 300,000 5) 雑収入 1,573,000 ① 同窓会名簿売上 514,000 ② ニッチ賛助金 1,059,000 ③ 広告料 0	4) 準会員援助費 0 5) 総会費 2,313,735 ① 総会通知印刷費 369,563 ② 総会通知発送費 1,866,600 ③ 懇親会費 50,000 ④ 雑費 27,572
	6) 本部費 30,000	6) 銀行利息 1,645	6) 百周年募金運動費 300,018 ① 郵送費 300,018
	7) 予備費 92,534	7) 組入金 1,042,290 ① 貸付信託 1,000,000 ② 郵便振替口座 42,290	7) 本部費 37,809 8) 予備費 0 9) 次年度繰越金 797,497
合 計 4,742,534	合 計 4,742,534	合計 5,893,269	合計 5,893,269

第24期(1989年)運用財産目録

(単位:円)

第 24 期 当 初		第 24 期 末	
1) 三井貸付信託元金	7,500,000	1) 三井貸付信託元金	9,500,000
2) 三井貸付信託積立口	2,665,643	2) 三井貸付信託積立口	85,893
3) 第一勧銀	779,534	3) 第一勧銀	797,497
4) 郵便振替口座	42,290	4) 郵便振替口座	0
計	10,987,467	計	10,383,390

(減 604,077)

第24期(1989年)財産運用報告

(単位:円)

	収 入	支 出	備 考
三井信託	2,000,000	0	貸付信託積立日より振替
三井信託 (積立信託)	420,250	3,000,000	貸付信託利息 420,250 貸付信託へ振替 2,000,000 一般会計へ組入れ 1,000,000
第一勧銀	17,963	0	797,497-779,534=17,963
郵便振替口座	0	42,290	一般会計へ組入れ
計	2,483,213	3,042,290	2,483,213-3,042,290=-604,077

会計監査報告 平成2年4月12日

帳簿、領収証監査の結果、記載が正確である事を認めます。

建築学科同窓会監査委員 近藤龍哉 印

高信碩文 印

第25期(1990年)一般会計予算

(単位:円)

収 入	支 出
1) 前年度繰越金 <u>797,497</u>	1) 会誌発刊費 <u>1,210,000</u> ① ニッチNo.14印刷費 980,000 ② 編集費 200,000 ③ 雑費 30,000
2) 会費 <u>1,993,000</u>	2) 各部会費 <u>100,000</u> ① OB通信費 100,000
3) 総会発送援助費(校友会より) <u>670,000</u>	3) 同窓会名簿整理費 <u>50,000</u> ① 整理費 30,000 ② 郵送費 20,000
4) 百周年募金運動援助費 (学校法人より) <u>300,000</u>	4) 準会員援助費 <u>0</u>
5) 雑収入 <u>1,400,000</u> ① 同窓会名簿売上 200,000 ② ニッチ賛助金 1,200,000	5) 総会費 <u>2,440,000</u> ① 総会通知印刷費 400,000 ② 総会通知発送費 1,950,000 ③ 懇親会費 60,000 ④ 雑費 30,000
6) 銀行利息 <u>400,000</u>	6) 百周年募金運動費 <u>334,000</u> ① 郵送費 134,000 ② 雑費 200,000
	7) 本部費 <u>40,000</u>
	8) 積立金 <u>1,000,000</u>
	9) 予備費 <u>386,497</u>
合 計 5,560,497	合 計 5,560,497

1990年版同窓会名簿

同窓会員販布額 5,000円(含送料)

会員外販布額 30,000円(含送料)

ニッチの賛助金と同じ振込用紙と一緒に御送金下さって結構ですが、裏面に名簿代5,000円と別記して下さるようお願いいたします。

この記入がないと、全額、ニッチ賛助金とみなされてしまいますので、よろしくお願い申し上げます。

■編集後記

湾岸戦争が我々の身近な生活にも除々に影響を及ぼすようになって、この戦争の帰趨が心配となっていたところ、停戦となりました。皆様には相変わらずお元気のことと存じます。本誌にご登場いただいた鈴木昇太郎氏、鈴木啓之氏の先輩が昨年相次いで亡くなりました。淋しい限りです。他にも本誌にご登場いただけなかった知り合いの先輩が次々と亡っており、残念でなりません。私共の知るこれらの先輩達は現実の社会の中で、個別具体的な問題に誠実に対処することによって建築家としての社会的責務を果たしてきたということではないかと思っています。私共、後輩もこのことを学習しなければなりません。

本号は篠原・金尾両先輩へのインタビュー、大学の木村氏による設計教育の経緯と今後のあり方についての記事、小高氏による築地時代からの工学院の歴史についての解説により構成されています。毎度、年度末の拙速の編集作業でお見苦しい限りですが、今後とも皆様のご支持をお願いします。

(初田, 岩田記)

ニッチ VOL.15 平成3年3月20日

発行 工学院大学建築学科同窓会
東京都新宿区西新宿1-24-2
〒163-91 TEL (03)3342-1211 内2025

編集者 初田 亨・岩田 俊二

印刷所 ㈱ プ リ ン ト ボ ー イ
東京都千代田区猿樂町1-3-6小宅ビル
〒101 TEL (03) 3295-9761

